

白山ふるさと文学賞

第五回 白山市ジュニア文芸賞 受賞作品

【島清部門】

中高校生小説の部 最優秀賞

ある少年の話

鳥越中学校三年

畑^{はた}

華穂里^{かほり}

「お願いだ。殺さないでくれ。」

バッシュ

「仕事終了。」

つまらなそうに死神が呟く。

「私はどうなつてもいい。どうかこの人は助けて。」

「仕事終了。」

つまらなそうに死神が呟く。

「あ、あなたは胸が痛まないの。」

死神に殺された男の妻が叫ぶように言う。

「貴女はなぜそんなに悲しむのですか。」

つまらなそうに問い返す。

「あなたにはわかんないわ。誰かを愛したこともないんですよ。誰かと会えてうれしいって気持ちや会えなくて寂しいって気持ち。愛する人が死んで悲しいって気持ち。絶対に分かんないわよ。」

叫ぶように、ヒステリックに彼女は言う。

「そうだ、貴方は死神なんですよ。なら私を殺して。この人がいないなんて生きてる意味がないわ。」

「できません。貴女は死ぬ運命ではありません。」

無情に、少年は言う。

そして、歩き出す。

「私だって寂しいですよ。誰も私を愛してはくれないのですから。」
小さくて、その声は誰にも届かない。

これは死神と死神が初めて愛した少女とのお話です。

黒い少年が町を歩く。何かを探して。

髪も眼も真っ黒で、ひたすらに退屈そうだ。それでも時々、目は何かを探してきよろきよろと動いている。

「見つけました。」

その視線の先には、少女がいる。白い少女だ。ぱっと笑う顔が印象的な、なんといか可愛らしい子だ。着ているものは上等なので、きつと金持ちなのだろう。

少年はその子に歩きかけて、

「まあ、いいでしょう。」

やめた。少し、興味を持ったのだ。なぜかは彼にも分からない。少年は、少女を観察してみることにした。

少女は明るかった。だが、常にどこか寂しそうな気もした。

何もないとところで突然しゃがむと、立ち上がった時には、小鳥をその手に抱えていた。

「助けられないかしら。」

「またですか。仕方ないですね、お嬢様。」

「仕方ないですよ。見つけちゃったんだから。」

ほおをふくらませる。

「はいはい、そうですね。私が預かっておきますよ。」

楽しそうだった。思わず、少年の顔が緩む。

「では、お嬢様また明日。」

少し間が空いた気がした。しかしすぐに、

「ええ、また明日。」

何事もなかったように少女は微笑んだ。どこか寂しそうな笑顔だったが、誰も気づくことは、なかった。

少女は家に戻っていった。

「そろそろ仕事の時間ですか。」

少年は呟いた。少し、残念そうに。

少女が倒れた。

「手遅れです。」

医者が告げた。

周りの大人たちは、ただ嘆くばかりだ。

ただ一人、少女だけが冷静に

「嘆かないですよ。最初から、分かってたでしょ。」

と言った。

少女は一人になると、静かに泣いた。

少年は、気付いた。彼女が常に寂しそだった理由を。彼女はいつか

こうなることが解っていたから、寂しそだったのだ。もう少しで死ん

でしまうから、寂しそだったのだ。

「きっと貴女も私と同じ孤独で悲しい存在。」

死神は小さく呟いた。

そして、普段ならしないことをした。

「泣かないでください。」

少年は、少女の前に姿を現した。人間に話しかけるなどしたことがな

かったのに。

「だれ。」

「死神です。」

「死神さん。」

不思議そうに呟いたが、少女に驚いた様子はなかった。

「そうです。死神です。貴女は一週間後に死ぬでしょう。」

「まあ、そうでしょうね。」

少女は、寂しそにつぶやいた。

「驚かないのですか。」

「最初から分かってたことだもの。」

「寂しくはないのですか。」

「それは寂しいわよ。遂に同い年の友達もできなかったしね。」

死神は少し考える。そして言う。思い切って。少女なら、大丈夫かもし

れないと思つて。

「死神でよろしければ、友となつて差し上げましょう。」

「…」

少し間が空いた。そして、悟る。所詮、少女も人間であること。そし

て、言うのだ。この化物が、つて。死神のくせに、つて。死神と人間は

相容れない存在なのだ。自分が傷つくと解っていたのになぜあんなこと

を言ってしまったのだろう。少女が自分と同じ孤独で悲しい存在だつ

て？それがどうして自分を拒絶しない理由になる？どうしてそんなこと

を思つた？

少女が何かを言うために息を吸う。

ほらそして言うぞ。なんて言うかな。化物かな死神のくせに言う

かな、それとも悲鳴をあげるのかな、ああ、もういっそ楽しみになつて

きた気もするよ。

「いいの？うれしいわ。よろしくね、死神さん。」

「え？」

輝くような笑みだった。卑屈な気持ちを吹き飛ばすくらい。

暴走しかけていた死神はその一言で、正気に戻された。

「どうしたの、死神さん。」

「い、いえ。こんなことは初めてなものでして。」

今まで出会つた人間は例外なく彼を怖れ、そして憎んだ。

「それは、貴方が歩み寄らなかつたからじゃないの。人間にとつて死神

はひたすら怖い存在だもの。誰も言われなきや分かんないわよ、貴方が

そんなこと思っているなんて。」

当たり前のように言われた。だが、そうかもしれない。死神は常に奪

うだけだったのだ。自分から話しかけようとしなかった。

正気に戻ると、なぜか意地悪を言う気にもなった。

「本当にいいのですか。確かに見た目は同じくらいですが、貴女の十倍

は軽く生きていますか。確かに思いますが。」

少女の顔が少しひきつったかもしれない。

「ま、まあいいんじゃないかしら。改めて、よろしくね、死神さん。」
「なんだかまだ言いたいことがあるそうだ。」

「どうしたのですか。」

「いえ、そういえば、死神さんの名前はなんていうのかしら、と思って。」

「私の名前、ですか。」

「そうよ。友達の名前で呼び合うものでしょう。」

「また、当たり前のように言われた。そういうものなのだろうか。分からない。死神には、名前という概念がないし、人間とまともに喋ったのも、この子が初めてなのだから。」

「名前はないのですが。」

「じゃあ、私がつけてもいいかしら。」

「ええ、まあ、いいですよ。」

「そうね、貴方は黒いから、ユオというのはどうでしょう。」

「ユオ、ですか。」

「どういう意味だろう。」

「ええと、確か北の方の言葉で夜という意味らしいわ。」

「夜か。まあ、確かに黒いな。」

「いいですよ。」

「やったあ。ユオ、これからもよろしくね。」

それから、少女はずっとうれしそうだった。

死神も、不思議な気分になっていた。彼女にユオと呼ばれるたび、胸が、暖かくなる。

これが、うれしいということなのか。

本当はこんなことするはずじゃなかった。

さっさと仕事を終わらせて、また、退屈な日々に戻るはずだった。単調な日々には飽きていたのかもしれない。

いや、恐らく、ユオは少女に恋をしていたのだ。彼も気付いてはいないのだろうが。少女に興味をもった時から。そして、少女に受け入れら

れて。

死神が町を歩く。白い娘を連れて。

彼らに残された時間は、幸せな時間なのだろうか。

見つけたのは、可愛らしい銀の首飾りだった。

「買ってよ、ユオ。ほら、友達でしょ。」

なんて凶々しい友達だろう、とユオは思った。だが、同時にこういうのも悪くない、と思い始めていた。

「はい、どうぞ。」

「くれるの。」

「友達、ですから。」

「ありがとう。大切にするわ。」

「まただ。輝くような笑みで言われて、ユオは戸惑った。」

「幸せ、だった。」

だが、そんな時は長くは続かない。

少女は自分の体が弱っていくのを感じていた。

大人たちは、気遣う。

ただ一人、少女は強がって

「大丈夫。」

といった。

ユオは胸が締め付けられるのを感じていた。そして、自覚した。自分は少女を特別だと思っていると。彼女にいなくなってほしくないと思っている。

だが、それは無理だと分かっている。彼自身が死神なのだから。運命は、変えられない。心の、身体の奥底に染みついている。

きつとその時がきたら、自分は間違いなく少女の命を刈り取るだろう。涙がこぼれそうになる。死神は泣けないはずなのに。

「やはり、死神が誰かを愛することなどできないのです。貴女がいない世界など意味がない。貴女と共に星になりたい。」

ユオは呟く。だがその声は少女には聞こえていない。

「泣かないで。」

少女は言う。

泣けるはずなどないのに。だが、これはなんだろう。

頬に熱いものが流れている。泣いているのか。人間が泣くのは見たことがあるけれど自分が泣くのは初めてだ。死神でも、泣くことができたのか。

「泣かないで。」

もう一度少女が言う。

だが、止めることはできない。これが、悲しいということか。

「きつと貴方も私と同じ孤独で悲しい存在。」

偶然だろう。だが、同じ言葉だった。

「でもねユオ、貴方と過ごせたから私は幸せになれたの。」

本当に幸せそうに言う。

その時を迎えた少女は晴れやかに笑っていた。

死神は心に誓う。貴女の記憶、死なない自分が永久に守ろうと。

もう、寂しくはない。

「仕事終了。」

声は、震えていた。

